
I'd like you to give him a message

西崎 勇次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I'd like you to give him a message

【Nコード】

N4302Y

【作者名】

西崎 勇次

【あらすじ】

ある日ある電話から、事件に巻き込まれる佐藤剛 さとうこう
その時は・・・

第一話 a historical event (前書き)

私は小説を書くのが初めてなので、文章のおかしな所や漢字間違いなどがあるのですがそこは目をつぶってもらえると幸いです

第一話 a historical event

気がつくと僕は知らない場所にいた。

ふと見ると、手にはak47を、握っている。

しかも、周りからは射撃音。しかし、落ち着いていた。まるで、普段道理みたいに。

後ろに人の気配がした。振り返ってみると、女性が居た。

ジーンズに、ジャンバーを着ていたが、ジャンバーの中は何も着てないようだ。

しかも、手が震えている。寒いからなのか。表情を見ようと顔を見たが、しかし、顔がぼやけてよく見えない。ひとまずこの場から彼女を連れて逃げなきゃ。そう思い、壁から飛び出る。

ふと左側をみると、男がak47をこちらに向けていた、しかも、引き金に指をかけている。

やばい、撃たれる。 バン

は・・・

夢か。しかし何か気味悪い夢だな。

しかも、12月なのに汗でびたびただし。

時計を見ると午前5時48分、まだ学校まで時間がある。

シャワーを浴びに布団を出るといつもより、寒く感じられた。

汗で濡れた服を脱ぎながら昨日のことを整理する。

一応記憶があるのは、午後7時頃飯食って、その後すげー、眠くなつて布団かぶって、ごろごろしていたら、寝たんだな。しっかしなんであんなに眠かつたんだろう。

申し遅れました。私佐藤剛さとうこうと申します。年は15、高校生です。

名前は強そうですが、マダオです。武術は一応柔道をやっていたが、地区で惨敗するようなザコです。

顔もあまり良くないし、頭も悪い。

そんな男です。

ふと時計を見ると6:30

やばい、シャワー浴びすぎた。時間やばいじゃん。

悪いけど、学校なんで、急ぎます。

あぶねー、学校遅刻するところだった。ま、遅刻してないだけ良いとするか。

さて、1時間目始まるまえに、携帯確認するか、お、メール1件と着信1個かひとまずメールから、

一つは友達から、お、今メール着た。誰から・・・え、木村から、題は、一人の時に見てください。

なんだこれ、中みたいけど、授業始まるし、題に一人でつてかいてあるから、昼間で待つか。

キンコンカーンコン

ふ、やっと終わった。昼飯は3時間目の放課に食ったし、武道場なら人も来ないし、あそこでメール見るか。

まっ、着いたけど、一応周りを見てみるか。・・・よし、誰もいない。

いやーやつぱ、好きな人から来るメールは楽しみだな。しかも、一人で見てくださいなんてなんか夢みたいだな。

本文は、「電話しろ。警察に行ったらこいつは殺す。」なんだこれ。どっかの脅迫か。

そしてメールには、写真か一枚付けられていた。その写真を見て私は戦慄した。

その写真には裸で縛られた木村が居た。周りには数人の男。

さすがにいきなりの事で動揺し訳が分からなかった。

ひとまず電話しよう。そう思ったときに、留守電を思い出した。見

てみると、案の定木村からだった。

聞いてみると、相当焦った声で、「助けて。変な男たちに付けられる。きゃ ガチャン」

それ聞いた瞬間、ちよつと把握できた。

たぶん木村は拉致されて、どこかで監禁されている。しかし、何で犯人は俺にメールを。

ま、ひとまず電話しないとな。

「もしもし、佐藤ですが」

「誰だ君は」男の声で鋭く言われた。

「メールをもらった者です。電話しろと書いてあったので」

「ああ、君か。私の指定した場所に来い。理由は分かっているよね。」

「はい、場所は」

「名駅裏の喫茶店レイン。君の特徴は」

「坊主でメガネ」

「わかった、着いたら電話しろ」

はい と言う前に電話は切れていた。くそー、警察言いてー、っーかなんで俺なんだ。

えーいこの際授業さぼってしまえ。

そして僕は学校を抜け出し名駅に向かった。

第一話 a historical event (後書き)

悪いところや良いところなどをコメントしてもらえたら幸いです

W e n e v e r k n o w w h a t f a t e w e m a y e n c o u n t e r

だいぶできが荒いかも。

そこら辺は許してください。

We never know what fate we may encounter

名古屋駅に着くまで、僕は汗が出ていた。

暑いからではない、急に現実が襲ってきたのだ。

彼女の縛られた写真、いきなりの留守電、そして謎の男。

普通だったら、電話の時点で、気が動転するはずだが、鈍感な僕は少し遅れてやってきた。

「何をやっているんだお前、さっさと逃げちまえよ、お前に何か出来るか。」

心の闇がそう呟く

「そうだよな、何も出来ないかも、でも、話を聞くだけでも何か進展するかも」

そう言っただけ自分を励ます。

そんなこんな心と格闘していたら名古屋駅に着いていた。

さて名古屋駅に着いたけど、実は、僕名古屋駅に土地勘無しです。

こんな大切なときに駅裏さえ分からない自分に腹が立つ。

仕方ない、電話してみるか、と、携帯を取り出し、電話帳から「木村さん」をさがし電話した。

「もしもし佐藤ですが。」

「着いたか。今からいくから」

「いえ、着いてないです。名駅からの道が分からないので」

「今どこだ」

「名駅です。」

「名駅のどこだ。」 男が軽く怒鳴った

「金時計前です。」

「地下街の3番出口から出てすぐの角を右に曲がりその後まっすぐ行けばある。着いたら連絡しろ」

「はい」

そう言っただけで電話を切った。

そして男の言われたように歩いていった。

喫茶店レインは、歩いて15分ぐらいの所にあつた。

中にはいると席は半分空いていた。空いていたテーブル席に座り珈琲を頼んだ後電話した。

「もしもし、つきました。」

「どこにいる。」

「窓際のテーブル席」

「今から迎えに行く。合い言葉は、 聖なる騎士団 だ。」

「分かりました」 そう言っただけで僕は電話を切った。

その後飲んだ珈琲はいやようにもまずく感じた。

何分かつたあと、二人組の男が入ってきた。そして僕に近づき「聖なる騎士団」と小さく行って来た。

「行きましようか」 そう言っただけで僕は残っていた珈琲を一気に飲み干しお金を払って店を出た。

そして、男たちに付いていき、そして1台の乗用車の前で止まり

「これをしろ」 そう言っただけで男が手に持ったのは黒い布目隠しとゆうことか。 そう思い僕はめがねを外し、黒い布で目を覆った。

そして、車に乗せられ、車は発進した。

続く。

W e n e v e r k n o w , w h a t f a t e w e m a y e n c o

わざと話の時は名古屋駅を名駅としました。

それ以外で誤字脱字があればどんどん書いてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4302y/>

I'd like you to give him a message

2011年11月20日23時29分発行